

こどもの詩感

新庄 よしこ

(一) 鯛は赤いけれど 焼くミ黒い 六歳男児

鯛はおいしいけれど 骨がある

すごい骨がある。

口繪にあるやうに、自由畫帳の一枚にかなり大きな鯛を描いて私に見せました。描かれた鯛について私と話して居る中に、ミぎれくゝに申したのが右の詩でございます。

お山つて、まんまるにかくものよ

人のあたまの半分みたいに書くものよ

これは庭の山を寫生しながらのこゝまばです。

東京の筈

六歳女児

お日様の下に生えたの

今に竹になつちやう

同じく自由畫帳から。

(二) きのふの粘土はかたくなつた 六歳男児

今日の粘土はベタく

糊よりつよいベタく

右は粘土をしたそのあきで。

(三) ぶらんこに乗るミ涼しいな 六歳女児

私の風が吹いてくる

ミても涼しい

初夏の或日、かううたひ乍ら、ぶらんこに乗つてゐる女児を見かけました。

(一)は自由畫の際に、(二)は粘土のあきで、(三)は遊びの中で、かうして幼児から思ひがけなく詩感を拾ひ上げるこゝまがあります。何げなく見える是等のこゝまばを、あらためて見直して見るミ、稚味の溢れてゐるのはいふ迄もなく、眞實感が躍動してゐるではありませんか。

幼児作のものをこゝへ舉げたからきて、是を童謡の上手

なものと申すのでもなければ又所謂童謡と比較をしたり、
價値を論じたりするのでもありません。たゞ、私は、幼児
の持つてゐる詩感を、拾ひあげたり、見つけたりしなけれ
ばならないのではないか、かう思ふのでございます。

かうして毎日幼児と暮して居りますと、このもの詩感
が、いろいろの形式で現はれて居ることを知ります。自由
畫の構圖、自由切紙の缺の線、粘土製作、是等はいづれも
無言詩であつて、詩感が詩として表現される形式は、やつ
ぱり、こゝばであります。幼稚園では、まさを對照はし
ない、こはいふものゝ、昨日よりは今日、今日よりは明日
へ、何ごも進んで行くべき筈であります。繪、切紙、
粘土等についてはかなり考へられてゐるやうですが、こ
ゝばの保育については、いさゝかなほゞりではないかと思は
れます。

このこゝばの保育を考へた時、一つの方法として、こ
もが、こゝばで詩感をあらはしたその機會を見のがさない
ことは、私共の使命であります。こゝいつて、チツミ見つめ
てゐたて仕方がありますまい。素直で、眞實感の一ぱい

な童謡を度々きかせり、花さか、繪さかを見せて一人一人
に、ありのまゝ、その感じを云はせて見る、こいふのも一つ
ですが、幼稚園では、製作を機縁として、こゝばの端を引
き出す場合も多くあります。前にも述べましたやうに、
自由に畫を描かせて居て、あそこでそれが何であるかの説明
を求めて見るのが、一番たやすく拾ひ上げられるやうに思
はれます。そのために私は、小さな手帳を、鉛筆をいつ
もふところに入れて居ります。こゝに書きこめたこゝばを
讀み返して見ますと、いよゝ味ふかく心に泌みこんでゆ
くやうです。

但し、先生が幼児から詩感を見つけた喜んでゐるばか
りではなんの意味もないことであります。詩として、うた
としてその子に幾度もよんで聞かせることを忘れてはなら
ないと思ひます。